友垣

発行
出雲市白枝町26番地
願楽寺内
龍松会
TEL 0853-28-1017
印刷
㈲ナガサコ印刷
出雲市下横町350
TEL 0853-28-2408

所感

願楽寺住職　西本巧恵

今年で住職継職、満四十年となりました。入寺直前に前住職が往生し、早々の継職法要勤修となりました。

まだ二十代、遠方富山県からということで当初は無我夢中で一日一日を過ごしていたように思います。特に方言、習慣の違い等、想像以上のものがありました。

ただ、その間　家族親族はもとより、門徒様のお育てにより、何とか勤めを果たしてこれたことは、感謝しかありません。

さて、去年の年末から今年の直近まで、若輩だった私をささえ、お育てくださった親族、ご門徒の方々が往生され、頭ではなく、四苦八苦、無常を深く体感させられました。

私のこれからの勤めは、その方々への報恩と考えております。滅私奉公とは中々いきませんが、自分の能力の範疇で勤めてまいりたいと思います。

まだコロナの渦中であります。そして、世界を見渡せば、あちこちで争いが起こり、またその種が育ちつつあります。

人間の有様を仏教に問い聴いていくことが本当に大切であると感ずるところです。

向寒の砌、皆様にはご自愛の程、念じあげます。

合掌

第51回　願楽寺念仏奉仕団（令和４年９月29日）

願楽寺念仏奉仕団参加二十五回目を終えて

渡橋町　柳楽義憲

第五十一回念仏奉仕団に、九月二十九日、三十日の二日間、参加者十七名（内女性五名）で参加いたしました。

近年の念仏奉仕は、コロナ禍のあおりを受け、令和二年と三年が中止となり、三年振りの開催となりました。

奉仕作業は、当初、九月二十九日と三十日の二日間行う予定でしたが、やはりコロナ禍の影響があり、二十九日の午後だけとなりました。

先ず安穏殿にてオリエンテーションがあり、次に御影堂にて開会式が行われました。

清掃奉仕作業は、御影堂の清掃でした。その後、書院拝観、記念撮影及び法話があり、そして閉会式となりましたが、慌ただしい半日でした。

聞法会館にて夕食、そして宿泊し、翌日は大谷本廟及び西本願寺の隣にある興正寺を参拝しました。

おかげ様で、私は今回二十五回目の参加となり、表彰を受けましたが、諸先輩の偉業により今日が有るのだとつくづく思い、感慨深いものがあります。この本山奉仕が未来永劫続きますよう念じて止みません。

合掌

新聞を見て思う

白枝町　日野一郎

最近、必ず見る新聞のページは死亡欄です。私も八十路の坂を数年ほど前に超えてからは、毎日のように先輩や後輩の死亡が気にかかるようになって参りました。もとより人の寿命は個々に依って異なると思いますが、年を重ねた為でしょうか、なんとなく気にかかる今日この頃です。

私が生まれて四才になる前に太平洋戦争が始りました。そして小学校二年生の時に終戦となったのですが、戦争中は食べ物が不足していて、家は農家でありながら麦ごはんを食べていました。また、おやつはさつま芋とか大豆の煎ったものを食べたことをよく覚えています。今とは比べものにならない生活状態でした。

今、ウクライナは戦争によって、たくさんの尊い人命が失われています。また今後は世界が食糧危機になるとも云われています。戦争によって国土が荒廃して、これから再興するのにどれだけの時間と労力を費やすことでしょうか、戦争はほんとうにみじめなものです。

そこで、今一度幸せを考えてみる時に、平和で戦争のない世の中であってほしいと思うのと同時に、人は健康で誰からも尊敬され、世間に役立つ人間でありたいものです。

私が高校を卒業する時、担任の先生から云われた言葉に「学校を卒業して社会に出たら、どこで住もうとも一人の人間として、掛け替えのない人になれ」と云われたことを今でもよく覚えています。このことは社会に役立つ人間になれという事と同時に、人には優しく誰からも信頼される人間になれという事だと思います。

昨年の夏、ひ孫が生まれてから思う事ですが、毎日の新聞、テレビを見るにつけ、これからは戦争のない平和な世の中でほしいと願わずにはいられません。子どもの成長を見るにつけ、年をとって行く自分を何となくさびしく思うこともある昨今です。

合掌

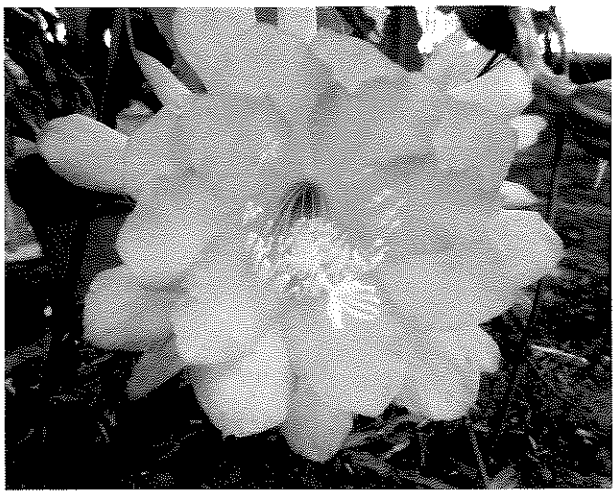
仏縁を偲ぶ

浜町　高橋義則

「風そよぐ　妻逝く白きそばの花」九月初旬に家内がみ仏様と皆様方に支えられ「お蔭さま」の生涯を閉じました。家内の里は曹洞宗ですが、家に来てからは、熱心に「浄土真宗」を信仰しました。私は母屋普請のとき、床の間の脇に仏間を造りました。新仏壇にしようと思い或仏壇店を尋ね、店長の案内で家内も一緒に見て廻りました。そこで金仏壇三〇号を選びました。時は平成十二年十一月でした。それから三ヶ月後に、仏壇開きの法要を行いました。

しばらくは、幸せな時間が続きました。人の幸せは何でしょうか。心の拠り所はどこでしょうか、誰もが持つ課題です。それは浄土真宗に生きることではないでしょうか。ここ近年は新型コロナを恐れ、交流ができないのは残念です。マスクを外す日が、龍松会に集まりが戻ることを念じます。

合掌



濁

松江市古曽志町・浄土真宗本願寺派布教使　目次知浄

「濁」とは、にごる・けがれる・よごれる・みだれるという意味があります。「にごった世の中だ」「よごれたやり方だ」という言葉は、仏教からきた言葉です。

経典の中に「五濁悪時」という言葉があります。「五濁の時代の人々よ」という意味です。

五濁とは次の五つをいいます。

一つ、劫濁（疫病などの社会悪の増大という時代の濁り）

二つ、見濁（思想の乱れ、まちがった考え方・見方によって濁ること）

三つ、煩悩濁（むさぼり、いかり、おろかさの煩悩が盛んになること）

四つ、衆生濁（人間の資質の低下、身と心とがだんだん悪くなること）

五つ、命濁（命の軽視、命を粗末にすること）

現代はまさに、この五濁の中で生きているのではないでしょうか。先の見えない不安をかかえながら生きています。

濁という言葉で思い出すことがあります。

生前、父がご門徒さん宅の法事に出かけた時、お酒が飲めないのに杯一杯のどぶろく（白く濁った酒）をごちそうになって、真っ赤な顔で帰ったことがありました。父はそのことを、後に法話の中で話したことがありました。演台に立った父が、

聴聞者に向かって話したことをそのまま書きます。

「人間は濁りを作るのが好きですな―。濁酒と書いて、どぶろくと言うんですな―。濁った酒ですわ―。酒の味は分からんが、おいしい、おいしい酒じゃった。同じ濁ると言うても、どうにもならん濁るが五つもありますで―、これも人間が作る濁りじゃ―。濁が好きですの―」

「その中で煩悩濁といいまして、一番ややこしい濁ですわ―。灰になるまで濁っておる。

困ったもんですわ―。欲におぼれる、いかりにもえる、見えては隠れ、隠れては出てしまう。おぞましい濁りを作りに作って生きておりますのじゃ―」

「貪欲（むさぼり）、瞋恚（いかり）、愚痴（おろかさ）の煩悩を三毒と言いまして、人間は毒をかかえ込んで生きておる。マムシ（毒蛇）の毒は吸うととれるが、人間の毒は吸うてもとれん。毒を思うままふき出すから濁るんじゃよ。恥ずかしいの―。恥ずかしいから手を合わす、合掌するんじゃ―。ありがたいの―」

そう話していたことを思い出しています。年を重ねるたびに父の法話が懐かしくなりました。父が、ところどころ書きまとめていたノートを出して、触れながら見ています。

―ひとりごと―

煩悩のかたまりを
押さえ　押さえながら
生きている
爆発しないように

（挿絵も筆者）

令和二年八月三十日
山陰中央新報
「教えの庭から」掲載

あとがき

二〇一九年十二月に、中国武漢市で最初の新型コロナウイルスの感染者が報告され、早三年。世界のパンデミックとなり経済や文化に大きく影響を与えてきた。やっとで平常の生活を取り戻しつつなってはきたが、まだまだ先行きは不透明。本年は参議院選挙が七月に執行、そして元総理大臣安部晋三氏が襲撃され亡くなった。二月にはロシアによるウクライナ侵攻で戦争がはじまった。

なかなか明るい話が見えてこない昨今であるが、心から笑える日が早くやって来ることを念じて止みません。

今回も友垣五十四号のご拝読ありがとうございます。引き続き皆様のご寄稿よろしくお願いいたします。

文化部　持田